



私たちの社会はなぜ 共同親権を 拒んできたのか？

2019年、子どもと引き離された私たち親12人は、国を相手に立法不作為の訴訟を起こしました。2人の親に1つの親権という婚姻外（離婚と未婚）の民法上の規定が、子の奪い合いや親子の生き別れを生み出しています。それには国に責任がある、とその違法性の認定を求めました。子を奪われた私たちのような思いをほかの人にはしてほしくないからです。

しかし今年1月、最高裁は私たちの訴えを門前払いしました。

その一方、私たちの訴訟と並行して審議が進んでいた民法改正案は成立。父母は婚姻外にも共同親権をとることができるようになりました。

では、今後親による子の連れ去りや親子の生き別れはなくなるのでしょうか。

民法改正の議論の最中には、子に会えない親を危険視し、社会の問題ではなく個人の問題として扱う発言がメディアにあふれました。私たちは、長らく変わることのなかった単独親権制度という民法上の規定の背景に、差別を許す社会の慣行や考え方があるのに気づきました。

いったいその正体は何なのか。

会を解散するにあたり、多くの人と議論を深めて共有し、活動を今後引き継いでいきたいと思えます。



日時 6月28日（土）13：00～16：30

場所 カトリック高円寺教会（東京都杉並区高円寺南2-33-32）
JR高円寺駅15分、丸ノ内線東高円寺徒歩10分、裏面に行き方
<http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi?page=%B6%B5%B2%F1%C3%CF%BF%DE>
*参加費無料

タイムスケジュール

13：00～ 活動報告、決算報告
14：15～ パネルトーク「単独親権文化って何だ？」
16：00～ 今後の活動について、原告から 16：30 終了

パネルトーク「単独親権文化って何だ？」

サンドラ・ヘフェリン（文筆家）「共同親権／単独親権 ドイツからはどう見える？」
鈴木明子（共同養育支援法全国連絡会、中央大学講師、民俗学）「日本には縁切り文化がある」
宗像 充（ライター、共同親権訴訟原告）「なかったことにされた戸籍と婚外子差別」

<プロフィール>



サンドラ・ヘフェリン

文筆家。ドイツ・ミュンヘン出身。日本歴 28 年。日本語とドイツ語の両方が母国語。自身が「日独ハーフ」であることから、「ハーフとバイリンガル教育」「ハーフと日本のいじめ問題」など、「多文化共生」をテーマに執筆活動をしている。共同親権については朝日新聞 GLOBE+ の記事「恋愛&結婚「外国に住もうよ」と言われたら【知っておきたいハーグ条約】」、「考え直したい『家』制度～『家』から『個人』を尊重する社会へ～」、「ハンガリーの日本人女性死亡事件で元夫逮捕「共同親権」が守る子の利益を改めて考える」の中で言及している。近著は『ドイツ人は飾らず・悩まず・さりりと老いる』（講談社）。

鈴木明子

博士（文学）。専門は日本民俗学。神奈川県綾瀬市、千葉県習志野市、長野県長野市、新潟県上越市などの自治体において民俗編執筆に携わる。現在、跡見学園女子大学・國學院大学・中央大学兼任講師。葛飾区文化財保護審議会委員。2025 年の民法改正時に参考人として法務委員会で家庭裁判所のあり方について問題提起。単著『おんなの身体論』（岩田書院）、共編著『民俗文化の探究』（同）、共著『人生儀礼事典』（小学館）。



宗像充

ライター。共同親権訴訟原告。大学時代は山岳部に所属し、登山、環境、平和、家族問題などをテーマに執筆をおこなう。子どもと引き離された自らの体験から、共同親権運動の言葉を作り市民運動を始める。2019 年に共同親権集団訴訟を呼びかけ国を訴える。著書に『子どもに会いたい親のためのハンドブック』、『共同親権』、『結婚がヤバい』（いずれも社会評論社）。

高円寺教会への行き方

